

書 評

山崎益吉 『横井小楠と道德哲学』

森 藤 一 史

YAMAZAKI Masukichi, Yokoi Shonan
and Moral Philosophy

Kazuya MORITOH

—

なぜ過去の思想家を研究するのか。なぜ、遺された史料を手がかりに過去の思想家の思想を再構築しようとするのか。「その思想家が好きだ」という個人的な理由もあるかも知れないが、多くの場合、時代を隔てたわれわれに、その思想家が何らかの形で「教訓」を与えてくれていると思われるからではないだろうか。もちろんその場合、われわれが直面している時代の諸問題を過去の時代に無媒介に読み込んではいけなしいし、われわれの問題意識を過去の思想家に直接的に投影してもいけない。このことは厳に慎まなければならない。その上で、一定の学問的な手続きを踏んで過去の思想家の思想を再構築した時、その思想家が分析者たるわれわれに何か語りかけてくるとすれば、われわれはその思想家から、彼が生きた過去のことばかりではなく、現代のわれわれにも通用する普遍的な「教訓」を学ぶことができるであろう。その際、分析者たるわれわれには研ぎ澄まされた現代的視点が必要であろう。われわれの生きている時代が直面している諸問題に対する鋭い問題意識が必要であろう。

『横井小楠と道德哲学』の著者山崎益吉教授は、1972年12月に「幕末経世論（一） 横井小楠・学問論」を『高崎経済大学論集』に発表されて以来精力的に横井小楠研究を続けられ、その成果を『横井小楠の社会経済思想』（1981年）にまとめられた。この著書に描かれた横井小楠像は、それまでの小楠研究の成果を踏まえつつ、経済学者ならではの独創性溢れるものになっていた。たとえば、第5章は「日本における自由主義経済思想の濫觴」と題され、小楠とアダム・スミスが比較検討されている。この、小楠とスミスの比較の視点は、以降、山崎教授において、様々な論点について検討され、本書『横井小楠と道德哲学』に結実したということができよう。そういう起点が既に『横

井小楠の社会経済思想』出版の時点で設定されていたのである。

もちろん、山崎教授の分析眼が、小楠を中心とした日本近世・幕末にだけ向けられていたわけではない。1980年にまとめられた論文集の表題『転換期の経済と社会』からも判るように、山崎教授は、小楠研究と並行して、70年代日本の経済と社会の実態を分析しその病理を明らかにしていたのである。この『転換期の経済と社会』の終章が「転換期の思想家横井小楠」となっていることは象徴的である。山崎教授の眼は、小楠の生きた幕末と自分が生きている現代とに同時に注がれていたのである。そして山崎教授は、小楠から「教訓」を学びとろうとされたのであった。そのキーワードは「総合大観」であった。まさに『横井小楠と道德哲学』の副題「総合大観の行方」へと続く問題意識であった。

二

まず最初に、『横井小楠と道德哲学』の構成を紹介しておこう。

第一章 横井小楠と『道德哲学』 A・スミスとの比較において

第二章 横井小楠の経済思想 『時務策』の現代的意義

第三章 横井小楠の経済思想 『富国論』の現代的意義

第四章 横井小楠と実学

第五章 横井小楠と日本の近代化

第六章 横井小楠と現代経済学

第七章 横井小楠の経済思想と経済合理主義

第八章 横井小楠の実学と東アジア

第九章 横井小楠と総合大観

次に、各章を簡単に概観しよう。

第一章「横井小楠と『道德哲学』」は、いわば本書の骨格をなす部分である。この章で、山崎教授は、金儲け主義の横行・企業倫理の崩壊など、いたるところで経済合理主義が破綻し、現在、経済と倫理の関係が問い直されていると述べて、たとえばアマーテア・セン教授の *Ethics and Economy* の議論を一つの典型として紹介しながら『道德哲学』が提唱される背景を明らかにしている。山崎教授によれば、「もともと『道德哲学』（Moral Philosophy）は、スコットランド啓蒙というかたちを通して、近代社会の人間の生き方、あり方を究明する学問として成立している」が、わが国においても「来るべき新しい社会への人間の生き方、あり方」を模索した人たちがいた。嚆矢は横井小楠であった、とされる。

では、なぜ小楠なのか。山崎教授によれば、徳川時代は儒教とりわけ朱子学が「教学」として尊重されたが、それは徳川権力のためのものであって、儒教本来のあり方からはずれていた。ところが小楠には、『時務策』を書いた天保期から既に「民政」の観点があり、その観点から「三代の学」

に返って「儒教本来の目的」を甦らせた（「儒教ルネッサンス」）。小楠において、「天理から天帝、天工へ」の概念の転換が果たされ、本来の「庶民を子とするの政教」が説かれることになった、とされるのである。

このような小楠と、A・スミスには共通点がある、と山崎教授は言われる。その一。「両者とも当時の主流から外れていた」。その二。「両者とも近代化への転換期の思想家であった。」その三。「両者の共通点は、天に対する認識である。」スミスの『『道徳哲学』の背後には理神論がある。この立場は小楠の天帝論によく似ている。」その四。「天帝論や理神論の意を受けて、人間社会に何を期待したかという、外からの枠づけなしの内面的な秩序を用意したということでも、同じ目線に立っている。」『労働を基礎に置いた国造り』。その五。「国富増進には何が必要かについても両者はまったく同じことを言っている。」その六。「両者とも経済論が道徳哲学の原因ではなく結果として導き出されているということである。」山崎教授によれば、スミスの『道徳哲学』は「1．自然神学、Natural Theology、2．倫理学、Ethics strictly so called、3．法学、Jurisprudence、4．経済学、Political Economy」から構成されているが、「横井小楠の『道徳哲学』も同じである。1．天帝論、2．人生論、3．実践論、4．経済論」である、と。

このようにスミスと小楠を比較した山崎教授は、両者の『道徳哲学』が現代社会に訴えかけるものとして、三点指摘する。第一点。「人間社会が本来持っている本質を体現しつつ、進むべき方向を示しているということ」。山崎教授によれば、スミスは「利己心」のみの解放など考えておらず、「人間行動の基準を同感の原理に置いた」。小楠の場合「致知後の誠意」である。ところが、「同感」は「同情」と混同され、「飽くことなき欲望」が「利己心」を優先させ、近代社会は「手段を選ばない経済主義」に陥ってしまった。「ここに、『道徳哲学』を甦らせなければならない最大の理由がある。小楠とスミスはそのことを強く訴えている」。第二点。「来るべき社会に秩序をもたらしたこと」、「市民に共通する物質的基礎の充実が経済学あるいは市民社会の秩序づけになるとするスミスの考えは、小楠にも同じように位置づけられている」。第三点。「現代社会が原理的に行き詰まって方向転換を余儀なくされている時期、小楠、スミスの『道徳哲学』はこれからいかにあらねばならないか、大きな指針を与えずにはおかないということ」。山崎教授によれば、いたるところに現出している「危機的状況」は「近代社会を支えている原理そのもの」の危機である。小楠、スミスの『道徳哲学』は、「原点に立ち返ることによって、現代社会に強く反省を求めている」。このことは、「端的に言えば、経済活動には倫理や道徳の裏付けが必要であるということである」、と。

以上のように山崎教授は、小楠をスミスと比較することによって、その『道徳哲学』の「現代的意義」を明らかにしようとした。

第二章では「横井小楠の経済思想」のうち『時務策』の「現代的意義」が検討される。すなわち、山崎教授は、小楠が江戸遊学中の酒失によって帰国した後、肥後藩の「上下困窮」という現実に直面して書いた『時務策』を、その「現代的意義」という視点から読み直しをされる。

山崎教授も指摘されているように、従来、『時務策』は『国是三論 富国論』との関連で論じら

れることが多く、単独で取り扱われることはほとんどなかった。しかし、『時務策』のもつ「徂徠学的な側面」にもかかわらず、注意深く読めば、「現代的意義」が読みとれる、とされる。それは、「上下困窮」を救う方法として「士民共に立ち行く道」を提起していることである。「困窮」に際してまずなすべきは「支出」の削減＝「節儉」であるが、それが「上の御難洪を下が救う」ことであってはならない、とされる。次は「収入の増加」をはかることであるが、「士民」の犠牲の上に藩だけが潤う「貨殖の利政」は「士民の利益に成る道を世話する富国の道」に反しているとされ、即刻「止める」ように主張された。そして小楠は、真の「富国の道」を追求するために、「規制緩和」ではなく「制度の立て直し」を求めた、とされる。

第三章では「横井小楠の経済思想」のうち『国是三論 富国論』の「現代的意義」が検討される。

山崎教授は、小楠の『道徳哲学』がスミスのように時系列的には展開されていないけれども、前述のように、(1) 天帝論、(2) 人生論、(3) 実践論、(4) 経済論という構成をもっており、それは「スミスの『道徳哲学』体系に完全に符節するものである」、とされる。このことを再確認された上で山崎教授は、『国是三論 富国論』のもつ「現代的意義」を次の七点に読みとられる。つまり、(1)「経国済民、経世済民の本来の意味が何であるか」を小楠の富国論は現代に強く訴えている、(2)「真の富とは何かを考えさせる」、(3)小楠の場合「交易」と言えば「外国貿易」だけではなく「三事」(正徳・利用・厚生)「六府」(水、火、木、金、土、穀)にもあてはまるが、「交易」本来の意味を地球規模で再考する必要がある、(4)小楠は経済活動の基礎に「至誠の惻怛」を据えていたが、小楠の「誠の実学」として経済学を再考する必要がある、(5)小楠は、「士民共に立ち行く道」を立てることが「政治」の使命と認識していたが、「政治、経済、福祉...を考える意味で治教 government の意味を再評価する必要がある」、(6)「グローバル・スタンダードが強調されているが、たとえば crony capitalism (仲間資本主義) ではない日本の基準が何かを考える上で、小楠の富国策は非常に重要である」、(7)「あらたな文明の衝突(S・ハンチントン)が話題になっているが、小楠の世界観を富国論の中でしっかり押さえておく必要がある」。

第四章「横井小楠と実学」で山崎教授は、小楠の朱子学が「実学」である所以を明らかにされた。まず、小楠が日本は「無政事の国」とするペリーの指摘に同意しつつ「徳川御一家の便利私営にして絶て天下を安んじ庶民を子とするの政教あることなし」という現状批判を行い、徳川幕府を「公議公論」の機関に組み替える「社会変革」に臨んだこと、そしてこの「公議公論」の発想が明治維新後にまで継承されたこと、を明らかにされた。また日本が直面している対外的危機に対して小楠は富国論によって国富増進をはかることで対応しようとしたが、その経済論の根柢には「仁政、惻怛の至誠」があった、とされる。山崎教授はここにも「スミスと同じ視点に立つ小楠を発見される。さらに教授は、小楠の実学が「堯舜孔子の道」に立った「誠の実学」であり、小楠以後の日本が歩んだ「武断主義」の道が小楠の「徳治主義」とは無縁である、と言われる。そして小楠の実学は、徳富蘇峰が特徴づけたように、「総合大観」であった、とされる。

第五章「横井小楠と日本の近代化」において山崎教授はまず、「日本の近代化は、日本の精神的伝統と西洋の近代合理主義の出会いであった」とされ、小楠が「堯舜孔子の道」をもって「西洋の近代合理主義」を「西洋器械の術」として受け止めたことの獨創性を強調される。周知のように、小楠は、「堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術をつくさば、なんぞ富国に止まらん、なんぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ」と述べたのであるが、山崎教授によれば、ここには、小楠の「四海同胞主義」「世界平和主義」が表現されている。「日本の近代化」が「経済合理主義の道」を歩み「経済至上主義」の矛盾がいたるところで噴出している今日、小楠に立ち戻って考え直さなければならないのではないか、というのが教授の主張であろう。

第六章「横井小楠と現代経済学」において山崎教授は、「経済主義時代」の弊害を自らの体験を交えて紹介され、こうした「経済合理主義の帰結」を現代経済学の中で位置づけられる。つまり、A・スミスにおいて「市民社会の論理学(anatomy)」として成立した経済学が、D・リカード、J・S・ミルに至る過程でスミスの『道德哲学』から分離し、さらにC・メンガー、L・ワルラス、S・ジェボンズら現代経済学の創始者達において労働価値論からも離れて「効用学派」へ至り、J・I・シュムペーターにおいては「経済学の autonomy(自律性)は、経済財の均衡関係」の問題に限定されることとなった。このように現代経済学が『道德哲学』と完全に無縁な存在になっていることを確認された上で、教授は、「富とは何か」という観点から小楠の『国是三論 富国論』を検討される。教授によれば、この「富国論」において「富」は、金銀ではなくて、庶民にとっての「有用な物」とされ、その「有用な物」を作る労働への着目がある。小楠にはスミスのような明確な分業論の展開はないが、国富の源泉を労働とする点で、また「道德」と「経済」を切り離すことなく論じている点で、小楠はスミスと軌を一にする、とされる。こうして小楠の経済思想は、現代経済学に大きな示唆を与えている、と言われる。

第七章「横井小楠の経済思想と経済合理主義」で山崎教授は、近代社会で成立した「市場経済」が「人間主義」の中に位置づけられていたこと、そして「経済合理主義」が「貨幣合理主義」として「貨幣そのものの増殖」を「目的化」して「人間主義」からかけ離れたこと、こうしてすべてが「貨幣」で評価される「価値観」の「本末転倒」が生じたこと、を指摘した上で、小楠の経済思想に依拠して、「単純市場主義」の問題を検討する。(1)小楠は交換あるいは市場を「天地間固有の定理」と考えており、市場に「人為」は入り込む余地はないと理解するとともに、信と義がないと市場は成立しない、と考えていた。従って、小楠に言わせれば、「単純市場主義」は本来の市場ではない、ということになる。(2)「物の合理[性]の追求だけによって社会は動いていない」という問題について、「小楠は西洋の合理主義を物の背後にある技術にあることを見抜き、事業上においては秀れているが「心徳がない」と一蹴している。「心徳」とは人間そのものであり、秀れた技術に裏うちされた物の世界の合理性だけで秩序は成立しないことを見抜いていたと言ってよからう。」と教授は言われる。(3)「社会、世界の動きはむしろ非市場的世界によって動いている」という問題について、教授は、小楠がすべての行動の基準に「誠」を据えていた、と捉え、教授は

「誠の精神が歴史を動かし人を動かし、歴史が形成されていく。貨幣ではない。」と言われる。このように教授は、小楠の経済思想に依拠して、「単純市場主義」を批判された。

第八章「横井小楠の実学と東アジア」は、2000年に日本で開催された東アジア実学研究会第6回研究大会が「貨幣支配文明の克服と実心実学」という統一テーマを決定するまでの経緯と、日本・中国・韓国からの報告を得て実際に開催された研究大会の様子、とを紹介するという形を取りながら、山崎教授が、この研究大会の基調報告源了圃氏「近世日本における「実学」の諸形態と「誠心的経世済民の実学」 横井小楠を中心として」の延長線上に、小楠と弟子の由利公正の貨幣論を報告した内容を掲載している。教授の報告の主旨は、小楠が『国是三論 富国論』で展開している「楮札・藩札」論には「下の者を利する」観点が貫かれており、今日の「惻怛の誠」「心徳」を忘れた投機マネーに警鐘を鳴らすものになっている、ということであった。

最後の第九章「横井小楠と総合大観」で山崎教授は、「自然・作為の二分法」の限界を指摘し、それに代わる新しい理論としてハイエクの「生成論」を紹介して、「J・S・ミル以来社会科学総合化をはかった唯一の人」と高く評価し、「A・スミスの『道徳哲学』の体系を想起せずにはおかない」と言われる。そして教授は、「日本における生成論の展開」を辿られ、小楠の思想を生成論として位置づけようとされる。すなわち、徳富蘇峰が小楠の思想を特徴づけた「総合大観」こそ小楠の思想的立場だった、とされるのである。小楠においては、「古いものを取り込むかたちで新しいものを生成していくという方法がとられている」とされるのである。こうして教授は、小楠の思想を「生成論」として把握し直すことによって、「危機に直面する現代社会」を克服する可能性を見いだそうとされたのである。

以上簡単に見てきたように、山崎教授は『横井小楠と道徳哲学』において小楠の思想をA・スミスの学問体系と比較することによって小楠の思想の「現代的意義」を鮮明に描き出すことに成功している。そういう意味で本書は過去の思想家から「教訓」を学び取る一つの見本をなしている。このような小楠分析は、経済学者である山崎教授にして初めて可能な独創性豊かな研究であり、『横井小楠の道徳哲学』という今後の研究構想への期待を抱かせるものである。

三

最後に、二点ばかり気になった点を述べさせていただいて、むすびとしたい。

第一点は、日本近世儒学思想史をどのように理解するか、という問題である。山崎教授は、折に触れて丸山眞男氏の『日本政治思想史研究』に言及されているが、いかに丸山氏の業績が名著だとしても基本的には戦時中の研究であり、戦後の研究が乗り越えた部分が多くある^{*1}。その一つは、中国停滞論である。丸山氏は、ヘーゲルに依拠して中国を歴史的発展のない「持続の帝国」として把握し、その「非歴史性」に照応した思想として儒教を位置づけられた。従って、丸山氏においては、新儒教と言われる朱子学成立の意味が分明ではなく、結局「自然」と「作為」の二分論におい

て朱子学は自然的秩序の思想とされた。つまり、朱子学も「対立を自己の内に孕まない」「非歴史的」思想とされたのである。だから、朱子学においては、「超越性と内在性、実体性と原理性が即自的に（無媒介に）結合」されており、個人道德と政治が連続している、と理解された。このような朱子学を否定する形で古学が成立し徂徠学において体系化された。丸山氏は、この徂徠学の中に「作為」の論理を読みとり「近代」の端緒とされたのであった。

だから、たとえば第三章で山崎教授が『富国論』の現代的意義を「朱子学的思惟の連続性」として捉えなければならぬ」と述べられた時、私はその真意を推し測りかねた（第四章・第五章・第六章・第八章にも「朱子学的思惟の連続性」という表現が使われている）。山崎教授には丸山氏とは異なる独自の朱子学理解・徂徠学理解があり、さらに第九章では「自然・作為の二分法」を否定されているのであるから、丸山氏の表現を使われることは却って議論を混乱させることになるのではないだろうか。

第二点は、A・スミスと横井小楠との間にある一世紀近いタイム・ラグをどう理解するか、という問題である。山崎教授において、スミスと小楠の共通性が強調されることによって、小楠のもつ「現代的意義」が非常に鮮明となったことは確かであるが、それにもかかわらず、両者の間にあるタイム・ラグ、そこから導出される相違点があることも確かである。それは、スミスが構想した「商業社会」(Commercial Society)の行く末をスミス自身見ることはなかったが、小楠は「利己心」の跋扈として「商業社会」の行く末を見ていたということである。

「世界人情唯々利害の欲心に落入り、一切天然の良心を消亡いたし、有名の国程此大弊甚しく有レ之候。」*2

この「利害の欲心」は、小楠において、「利害の私心」などと呼ばれて「本然の良心」「良心」の対極に置かれ、否定されるべきものであった*3。小楠において、「私営の政」が否定されて「公共の政」が希求されたと同じように、「利己心」の否定の上に「良心」の発現に基づく「天地公共の道」が構想されていた。

この、スミスと小楠の間にあるタイム・ラグと相違点をどのように考えるか、という問題が残されているように思われる。

（もりとう かずや・大阪外国語大学教授）

註

* 1 たとえば、守本順一郎『東洋政治思想史研究』未来社、1968年。

* 2 「横井小左平太・大平宛（明治元年9月15日）」『日本思想大系 55 渡邊華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』岩波書店、1971年、489頁。

* 3 拙稿「横井小楠における儒教的理想主義と天皇制」（岩間一雄編『近代とは何であったか』大学教育出版、1997年）参照。